

令和6年度 蜷川体協 初夏のわくわくウォーキング

「歴史に触れる 富岩運河～岩瀬の街並み」

令和6年6月9日（日）8：30～15：30

電鉄富山駅



還水公園



中島閘門



馬場記念公園



富山港展望台



岩瀬の街並み



カナル会館（昼食休憩）



岩瀬駅



電鉄富山駅

予定

1

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|---------------------------------------|
| 8:00 | 受付（蜷川小学校） | 12:00 | 岩瀬の街並み
・北前船廻船問屋森家(現在休館)
・富山港展望台 |
| 8:30 | 開会あいさつ | | |
| 8:50 | 出発
※上堀駅にはトイレはありません。 | 12:30 | 岩瀬カナル会館（昼食休憩） |
| 9:10 | 上堀駅到着 | 13:46 | 岩瀬浜駅発（大学前行） |
| 9:18 | 上堀駅発 | 14:15 | 富山駅着 |
| 9:35 | 電鉄富山駅着 | 14:45 | 電鉄富山駅発 |
| 9:45 | ウォーキング開始 | 15:01 | 上堀駅着 |
| 10:00 | 環水公園 | 15:20 | 蜷川小学校到着 |
| 10:40 | 中島閘門
（トイレ休憩） | 15:30 | 解散 |
| 11:30 | 馬場記念公園
（トイレ休憩） | | |

1. 富岩運河環水公園 「今では憩いの場所」

とやま都市M I R A I計画のシンボルゾーンとして、水辺空間の豊かさを大切にしながら整備される面積9.8haの親水文化公園です。

富山の自然と富岩運河の歴史を活かしたこの空間は、地域の文化や未来を見つめ、創造するオアシスとなります。



(1) 富岩運河の誕生

馳越線工事により流路が直線となった神通川の廃川地に、運河を開削し、その掘削土を埋め立てに利用するという、一石二鳥の妙案が出され、昭和6年に起工し、昭和9年に完工しました。

富岩運河の沿岸は、大きな水力発電所で作られる廉価な電力と豊富な工業用水、整備された東岩瀬港（現富山港）、運河と並行に走る富岩鉄道（現富山港線）など工業用地としては最適の環境が整っており、工業地帯とする計画でした。



対岸貿易が活発化していた時期であり、大陸からの原材料を港から運河を使って直接工場に運び、出来上がった製品を鉄道を使って全国へ運ぶということが可能で、こうした立地から次々に近代的大工場が建設されていきました。

(2) 邪魔者扱い、あわや富岩運河消滅の危機！？

工場への水運に活躍した富岩運河でしたが、戦後の高度経済成長期に入ると本来の利用をされなくなり、運河は木材の大量輸送によって木材貯木場と化しました。木材に占領され、周辺からの廃水が流れ込んだため、ヘドロが底に推積し、富岩運河は市民から邪魔者扱いされるようになったのです。

追い打ちをかけるように昭和52年、県は船溜（ふなだまり・現在の環水公園辺り）から国道8号線までの2.3kmを埋め立て、幅25mの道路建設を発表しました。もし、この計画が実現していたら、中島閘門は取り壊されていたことでしょう。

しかし、60年代に入って一転、新たなウォーターフロント構想が叫ばれると、富岩運河も整備計画のなかに位置づけられ、親水公園として整備が進められることになり、現在に至っています。

2. 中島閘門 「富山のパンマ運河」

中島閘門は、富岩運河の中流部（河口から約3.1 km上流）に、運河の開削にあわせて昭和9年（1934年）に設置され、当時は工業用原料を運ぶ船が往来するなど、富岩運河のシンボルとして大きな役割を果たしてきました。

建設から64年経過した平成10年（1998年）には、復元工事を行い、同年5月に昭和の土木構造物では全国で初めて国の重要文化財に指定されました。

中島閘門は、パンマ運河と同じ複扉室（ふくひしつ）閘門で、上流側標高が約2.7 m、下流側標高約0.2 mの水位差約2.5 mを調整する為の閘門で200 t級までの船舶が往来できます。



中島閘門

ここだけの話

中島閘門のそばには同じ方式の牛島閘門があります。



牛島閘門

3. 馬場記念公園 ～かつての富山大学があった場所

元々この土地は、北前船の交易で財を成した東岩瀬の廻船問屋馬場家の所有でしたが、当主馬場はる氏がこの土地を高等学校（旧制）の用地として寄付したことで、1924年（大正13年）4月に同地に富山高等学校が設立、戦後の富山大学文理学部を経て、同校の移転後、1971年（昭和46年）に公園として整備されました。



馬場記念公園

馬場家をはじめ、岩瀬の米田家、大島家や県内の多くの方の寄贈により、富山高等学校が設立し、その目玉としてヘルン文庫が創設されました。

高等学校創設のきっかけは、はる氏の長男が1923年（大正12年）県立富山中学を卒業して慶応義塾に入学した際に、長男の受験勉強の姿を目の当たりにしたためともいわれています。

当時日本全体で高校が少なく、入学試験はとても難しかったとのこと。

「県内にも高校があればいいのに」と考えたのは、はる氏ばかりではなく、多くの県民の願いでもあったようです。



馬場はる刀自像

ここだけの話 ヘルン文庫とは？

「ヘルン文庫」のヘルンとは、ラフカディオ・ハーン、小泉八雲のことで、ヘルン文庫には計2435冊（晩年の手書き原稿1200枚も含む）が収蔵されています。



小泉八雲

【ヘルン文庫創設の経緯】

旧制富山高等学校の初代校長 南日恒太郎（英語学者で英語教育の第一人者として広く知られた）の実弟で、小泉八雲の研究者である田部隆次の斡旋により購入しました。

これは、南日校長が旧制富山高等学校設立の目玉となるものを探していた折、関東大震災により、小泉八雲の著書などを移転保管する場所を小泉家が探しているのを田部氏が聞きつけ、南日校長に相談し、実現したものです。現在は、富山大学に移転し保管されています。



なお、現在公園内には、1962年に校舎が移転するまで公園内にあった図書館「小泉八雲図書館（ヘルン文庫）」をモチーフに設計した富山市立北部児童館が開館し、小泉八雲の足跡などのパネルが展示されています。

富山市立北部児童館

4.富山港展望台 富山港のシンボルとして

港湾の利用促進を図るため、富山市の海の玄関口である富山港のシンボリック施設として、海とのふれあいの場や県内外との交流に活用されるよう、伏木富山港（富山地区）港湾環境整備事業（緑地）の一環として、昭和60年11月に建設されました。



富山港展望台

展望台の形状は、北前船の時代に活況を呈していた東岩瀬湊（富山港）の歴史や文化に配慮して、当時港の守護神として船方衆の尊敬を集めた荒木町金刀比羅社（琴平神社）の境内に建つ「常夜燈」をモデルにしています。（右下写真）

当時は「常夜燈」が燈台の役目を果たしていたといわれており、船の安全と港の繁栄を願う思いが込められたデザインです。なお、展望台にはエレベータはありません。

これが富山港展望台のモデルとなった金刀比羅社（琴平神社）の「常夜燈」です。

当時はこの付近まで海岸がありました。



